批評の精神

高橋英夫著

中央公論社

批評の精神

高橋英夫著

中央公論社

批評の精神　　©1970　定価 680円
昭和45年12月15日印刷　昭和45年12月25日発行　検印廃止
著者　高橋英夫　発行者　山越　豊　印刷所　三陽社

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2丁目1番地　振替東京34番

1970年

中央公論社刊

目次

小林秀雄との出会い——序にかえて　7
批評における出会い　私の小林秀雄体験　生きることとしての批評　表現としての批評　批評の行方

河上徹太郎——批評における他者と自我　33
批評と自我の交錯　ピアノに凭った〈観念〉の模索者　サンボリスムの神の行方　文学的殉教における誤差　サンボリスムによる解釈学　〈思想〉の自己析出について

大岡昇平——幻覚と批評のあいだ　95
幻覚の歓喜　回想的人間　サンボリスムの条件　サンボリスムの解決　「作品」の時代　知性と狂気について

福田恆存——批評における正義　133
〈良識〉を拒むもの　『民衆の心』　自我・知識人・民衆の三分割　マクベスをめぐって　『芥川龍之介』　詩的正義について　虚としての正義

神西清——美と批評のあいだ　159
言語意志の毒　エステートの条件　人間と事件の出会い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

人性批評の芸術　非情の美と言語の美
林　達夫――批評における反語的精神　185
ある論争について　西田哲学批判　『デカルトのポリティク』
反語的な社会批判　学問と人間の可逆性　その人間形成Ⅰ
その人間形成Ⅱ　その学問　学問的衝撃のもとに
唐木順三――精神と批評のあいだ　225
心と精神　批評精神の二途　哲学と文学　学問とジャーナリズム　学問の抒情化　二元と一元のあいだで
折口学の発想序説　253
〈折口学〉・〈柳田学〉という名辞　新しき国学　自我の構造
折口信夫の周辺　〈発想〉　折口信夫伝説について　折口信夫は古代人か？　古代認識の方法　末代の自覚　大伴家持について　ポエタ・ドクトゥス
ふたたび小林秀雄とともに　305
精神と思想の訣れ　批評と学問と
あとがき　316

批評の精神

小林秀雄との出会い ——序にかえて

批評における出会い

批評とは何かという問いに対して、単なる教科書ふうの、または解説ふうの答えの域を超えて、問題の本質に深くかかわる答えが示されたならば、その答えはすでに批評であろう。これくらい批評の特異性をはっきり示した事情は、ほかにはない。小説や詩は、この点で趣きを異にしている。たとえば、小説とは何かと訊かれたとき、『ドン・キホーテ』や『赤と黒』を持ち出して、これが小説というものだと実物で答えることもできる。また、小説の歴史・技法・効用などを小説論として説いて答えることもできる。前者は小説の表現によって答え、後者は小説の認識によって答えていると言えるが、この二つの立場はそれぞれ独立して存在しうるもので、それがそのまま並んでいても、いっこうに差支えがないのである。

しかし批評とは何かと訊かれて答えようとするときは、それがどんな内容であっても、その答えは、

表現による答えと、認識による答えとが、できうるかぎり接近しようとする方向性のうえに立ったものとならざるをえない。こうして、表現と認識とがたがいに惹き合う磁場をもっていることが批評の批評であるゆえんであり、つきつめれば、批評の究極形態は表現と認識との完全な一致となってあらわれるであろう、と予想することができる。批評とは何かに答えるものもまた、批評である。批評は批評に出会うのである。批評するという行為の実際の仕事は知的な操作・論理的判断であるが、それも結局はこういう出会いの現象学、あるいは出会いの人間学の裏付けをまって初めて可能になる。

批評が批評に出会うということは、人間が人間に出会うさまざまの場合の一つの特殊なケースにすぎない。ただ批評は、人間の外見や表情に出会うのではなく、人間の原質とか核心とかに出会おうと志すことであり、その意味で人間を精神というかたちに限定してとらえるのである。批評における出会いとは、精神が精神に出会うということであり、これが人間と人間との出会いの極限化の一形式であるのは、言うまでもない。

それならば、小説や伝記が人間像を描き出すことを目標としているのと、批評というジャンルは、どこが違うのだろうか。小説や伝記では、そこにそういうジャンルがあり、そのジャンルに適切な手法があるということは、証明済みの問題である。そこにおいて人間の姿が求められ、人間と人間との出会いが期待されていることは、いわば初めから確信されているのである。人間的なものの確立が不可能であることをことごとに言い立てる現代的小説でさえも、基準として人間性それ自体を尺度にすることをやめるわけにはゆかない。しかし批評は、そこが違うと言えるだろう。生身の姿で、具体的

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

な表情や雰囲気をもってあらわれる人間は、危険ではない。それに対して、こちらも人間的に反応することができるからだ。しかしその内部にある精神が単独者としてあらわれたとき、批評がはじまるのである。批評は人間に出会うことを予定して出発したのではなかった。人間を人間にとって安全な存在に馴致するために、人間と出会おうとしたのではなかった。小説や伝記のなかにも批評の眼はあるし、もっと日常的な生活のすみずみで批評は生の一部分となって見出されはするが、本質的に批評は自と他の非連続に基づいた思想の動きなのであり、人間を不可測なものと認め、存在の不可測性を感ずるところからはじまるのである。批評の磁場に精神があらわれるのは、精神が、いま言ったようにきわめて人間的なものでありながら、人間を抽象化したり人間を扼殺したりする力ももっている危険な存在だからである。

それゆえ批評というジャンルでとらえられた人間は、人間と人間とが出会うことは不可測であり、証明も予想もできないという運命観のもとで見られた人間である。出会いによって、人間が自分の内部にいよいよ定着するかも知れないし、出会いの瞬間の閃光だけ残って人間が砕け散ってしまわないともかぎらない。批評においては、人間は安定した存在ではなく、いつ消滅するかも知れない危険をはらみながら、出会いのなかに姿をあらわすのである。

こうして批評における出会いにともなう不安というものは、人間の意識が人間の存在をつねに凌駕しようとする後世あるいは末世を特長づけるものであると言える。ここで、そういう批評における出会いを、二つの典型について見てみよう。まず、小林秀雄が玻璃（はり）の球体を砕くとでもいった荒々しい

出会いを語った一文がここにある。

僕が、はじめてランボオに、出くはしたのは、廿三歳の春であつた。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いてゐた、と書いてもよい。向うからやつて来た見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめしたのである。僕には、何んの準備もなかつた。ある本屋の店頭で、偶然見付けたメルキュウル版の「地獄の季節」の見すぼらしい豆本に、どんなに烈しい爆薬が仕掛けられてゐたか、僕は夢にも考へてはゐなかつた。而も、この爆弾の発火装置は、僕の覚束ない語学の力なぞ殆ど問題ではないくらゐ敏感に出来てゐた。豆本は見事に炸裂し、僕は、数年の間、ランボオといふ事件の渦中にあつた。

（『ランボオⅢ』）

ここには、何によっても己れを充たしえない若き小林秀雄の批評精神が、ランボオに達して初めてその批評を言語化する契機をつかんだことが語られているが、この事件は、一種の狂暴な〈出会い〉として一挙に起こったのだということに注意しよう。ランボオは、もとより批評家ではない。しかしその〈言語の錬金術〉の幻惑のあいだから、ランボオが小林秀雄の前に姿をあらわしたこの事件は、明らかに、批評における出会いの特長である精神が精神に触れ合う危機という様相をもっていた。

それは確かに事件であつた様に思はれる。文学とは他人にとつて何んであれ、少くとも、自分に

とつては、或る思想、或る観念、いや一つの言葉さへ現実の事件である、とはじめて教へてくれたのは、ランボオだつた様にも思はれる。

この小林秀雄の場合を男性的と評するなら、それと対照的に、女性的な典雅さで出会いの秘義を批評化して見せた典型は、たとえばウィーンの芸術家ホーフマンスタールの散文『道と出会い』（一九〇七年）であろう。女性的とは言っても、出会いを内なるものとして追いつめる言葉の力は幽暗であり、したがって不気味に激しいところがある。

しかし何はともあれ、行く、探す、出会うということがエロスの秘義に属しているのは、確かなのである。迂曲する人生の道の上では、われわれは自分自身の行為によって前に押しやられるだけにとどまらない。いつもどこかに潜んで待ち受けているらしい何ものかが、われわれを誘引しているらしいということも、確かなのである。……出会いのときのように官能が精神的になり、精神が官能的になる瞬間はない。そのとき、すべてが可能になっているのである。すべてが動きになり、溶解された状態になっている。それはまだ欲望の萌なしに相互に求め合うことだ。親しみと羞じらいの素朴な混合なのだ。そこには鹿のごときもの、鳥のごときもの、獣の鈍さなるもの、天使の清浄なるもの、神のごときものがある。挨拶というものは、なにか無限なるものだ。ダンテは『新生』は彼に送られたある挨拶に発していると記した。巨鳥が啼く声は不思議だ。朝の薄明りに、一番高

い樅の木からの、妖しく寂しい、先史時代のような声、それをどこかで牝雞が聴いている。この「どこか」、この漠どしたもの、激しく希求するもの、見知らぬもの同士が呼び交す叫びは、巨大な力だ。出会いは、抱擁によって支えられた以上のものを約束する。こう言ってよいなら、それは事物のより高い秩序に、星々の運行、思想の相互の受胎を司るあの秩序に、属しているように見える。

これはホーフマンスタールの詩精神を圧縮したような一節であるが、ここでは、出会いは人間が人間に出会うことをも含めて、よりメタフィジックな広がりにおいて語られている。ある意味では出会いくらい偶然的なものはないが、その出会いのなかから人間があらわれ、さらに精神が出現すれば、それはもはや偶然にとどまっていないだろう。また、出会いくらい不可測なものはないが、そういう出会いの本質を洞察しえたならば、出会いと出会いにおいてあらわれる精神は、人間を超えた運命の関連の一環となってゆくだろう。ホーフマンスタールはそういう出会いの隠微な消息を、「官能が精神的になり、精神が官能的になる瞬間」と考える。これは、言いかえれば、表現が認識となり、認識が表現となる瞬間、つまり批評の状態を示しているのである。批評の魅力とは、こうして、一方で現実に対応しながらポエジーと直結しうること、およびそういう二重性が批評において極限形式をとっていること、さらに、認識と表現の相関関係が現象学的な微妙さをもっていること、最後に、そのあいだから結局は人間の精神が姿をあらわすことである、と言ってよいであろう。

私の小林秀雄体験

ここで私は、自分の私的な内面を過去へ遡ってみないわけにはゆかない。まだ十代のなかばのころ、敗戦後まもない激動の時代のなかで、私の心はいつとはなしに文学に惹かれはじめていたが、そのとき私が初めて読んだ批評家は、小林秀雄だった。爾来二十数年が過ぎたが、いまだに私は、自分が小林秀雄にとり憑かれ、小林秀雄の呪縛を受けているのを、認めざるをえない。そしてこの私にとって長かった過程を顧みると、その最初にあったのはたしかに小林秀雄との〈出会い〉と言うよりほかはないものだった、という気がしてくる。小林秀雄が神田の街頭でランボオとめぐり会った〈事件〉のようなドラマティックな記憶は、何ひとつ残ってはいないが、初めて『モオツァルト』や『無常という事』を読んで、こういう批評のなかに精神が生きてゆく領域があるのだと知ったことは、私にとっては限りなく重い一齣であった。批評は精神にとって最も直接的な表現に感じられるという理由で、私を惹きつけたようである。このようにして私が求めている精神の発火点となり、その後、意識の底流として流れつづけていたのが、つねに小林秀雄であったのを、私はその後おりにふれて確認してきた。

しかしそれと並んで、小林秀雄から受けた苦痛の感情がどんなに私を悩ませたかということも、言

わなくてはならない。たしかに、彼の透徹した強靱な論法、日本語の表現力を極端に酷使して絞り出されたレトリック、さらにしだいに沈静をましてゆく内面的な視線は私を酔わせた。そして自己を小林秀雄と同一化させ、小林秀雄の言葉で判断し、小林秀雄の眼でものを見ることをいつしかはじめたとき、いわばその快楽の頂点において、最も大きい苦痛が私を襲ったのである。まず、小林秀雄を読んだ後、その昂奮のほてりは、私がほかの小説、ほかの評論を読むことを不可能にしてしまった。どんな流麗な描写も、生気ある論理も、なぜか私には空しい気がし、それを読むあいだ自分の心と波長を合わせておくのに骨が折れた。文学と限らず、一般に批評に関心をもつ青年に往々にして起こる例ではないかと思うが、私はほとんどの原作を読むことなしに、小林秀雄の批評文を通じて何らかの原作に接し、それを評価し、理解しているつもりになっていた。私はそれが自分の怠惰を小林秀雄という装置を通じてごまかそうとする自己謀略にすぎず、空しい錯覚以上のものではないとはっきり知ってはいたが、それを知ってもなお、そういう姿勢を保ちつづけることをやめようとはしなかった。ある作家が論ずるに値する存在であるかどうか、ある作品を肯定すべきなのか否定すべきなのか、ということを考えるとき、私がつねに思ったのは、これは小林秀雄ならばどういうふうに判断するだろうか、ということだった。文芸雑誌もほとんど読まず、文学史にも文壇の内外にも何ら知識のない若者がそんなことを考えるのは、たしかに滑稽であるが、それが私のその当時の偽らぬ心理だったのである。さらに、私はそれを逃れられぬ不毛と観念して、敢えて否定しようともしなかった。ただ、小林秀雄は私にとって苦痛と快感の増大であることが確実であり、その存在は生ま生ましくて、いつしか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co